

「エヴリン」におけるアイルランド性への回帰と船乗りの帰還

田中恵理

はじめに

「エヴリン」は、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の短編集『ダブリナーズ』の中でも「パラリシス」を最も典型的に描写しているとされてきた。そこに新たな読みの可能性を示したのはヒュー・ケナー (Hugh Kenner) だが、ケナーは、1972年の論考“Molly’s Masterstroke”において、主人公エヴリンが恋人フランクとの逢瀬を想起している一文、“He had fallen on his feet in Buenos Ayres, he said, and had come over to the old country just for a holiday.” (EV: 101-02) の“he said”の前後にあるコンマに注目し、これは信頼できる語り手が語っているのではなく、フランク自身の言葉をエヴリンが引用しているにすぎないとした。つまり、フランクの言葉は信用に足るものではなく、エヴリンは他国で売り飛ばされる難を運よく逃れたと主張したのである。その後、「エヴリン」論はケナーの説を中心に繰り広げられ、近年では、社会・歴史的コンテクストから、エヴリンの心情や置かれている立場を読み取ることに重点が置かれている。本発表では、これまでの「エヴリン」批評の流れを捉えたうえで、なぜエヴリンは国外脱出を断念したのかという問いに立ち返り、その理由を再考した。その際、エヴリンの揺れ動く心情に注目することで、彼女の国外脱出断念がアイルランド性と異国性との間での揺れに起因していること、異国性への希求がアイルランド性への回帰に向かうというパラドックスにエヴリンが何度も陥っていること、そして、そこにはフランクの船乗りという人物像も関連していることを読み取った。

エヴリンのアイルランド性への回帰

物語冒頭からエヴリンの心は、アイルランド性と異国性との間で揺れ動いている。疲れ果てたエヴリンが窓にもたれかかって外を眺めている姿と彼女がベルファストの男の家など昔の出来事を思い出している様子には、エヴリンがダブリンと自分の家の息苦しさを感じている一方で自分の外側の世界、つまり異国性を感傷的に想起しているのがわかる。しかしその直後に“Home!” (EV:24) と叫ぶ様子から、エヴリンがアイルランド性へと回帰している様子が示唆される。また、17世紀のフランスの修道女マルグリド＝マリ・アラコックの色刷り版画と父親の学友だった、現在メルボルンにいる司祭の写真に目を留める箇所には、異国へのエヴリンの関心が強調される。しかし、その後すぐに彼女の心に迷いが生じ、アイルランドの“home”と異国でフランクと築く新しい“home”が対置される形でエヴリンの心に思い浮かぶ (EV: 37-52)。異国の“home”での暮らしは、具体性に欠け想像の域を出ないばかりか情報が欠如しており、彼女の異国の地で生きることへの不安を助長する。一方、アイルランドの“home”についての描写には、馴染みの地への安心感やそこで生きてきたという自己正当化が読み取れる。

また、フランクとの思い出や話を感傷的に思い出したエヴリンは異国性に惹きつけられるが、突然脳裏に浮かんだ父親の言葉によりアイルランド性へと引き戻される。それと同時に、外から聞こえてくる手回しオルガンが奏でるイタリアの哀愁を帯びた曲が彼女に母親との約束と母親の臨終の場面を思い出させ、さらにこの異国のメロディーがエヴリンの意識の中で母親の狂気の叫び：“Derevaun Seraun! Derevaun Seraun!” (EV: 129) に置き換わることにより、エヴリンは逃げ出すことを決心する。とはいえ、この彼女の国外脱出への決心もすぐに揺らぐのだが、それは、異国性を希求してもアイルランド性へと回帰してしまうエヴリンの心情の揺れが物語冒頭から繰り返し描かれることにより暗示されている。北埠頭に到着後の場面で描かれるのは、エヴリンの身体的な揺れの様子であるが、語り手がエヴリンの立場からエヴリンの様子を叙述しているこの場面は、異国への旅立ちとアイルランドへの引き返しとの間で揺れるエヴリンの精神状態を明確に文体に移しているといえる。したがって、エヴリンが呆然と立ち尽くす姿が示唆するのは、彼女がアイルランドと異国との境界を象徴する波止場という空間で進むことも引き返すこともできない状態にあると解釈できる。

フローレンス・ウォルツル (Florence Walzl) の指摘にある、大飢饉以降の経済的欠乏により多くの人が苦境を強いられていて、特に若い女性は経済的機会も結婚の機会も限られていたことや (33)、抑圧的な父子関係および母と娘の関係がアイルランドの典型的な家庭像であったことなどを参照すると、エヴリンの置かれた立場は、経済的自立や自己決定が制限されている同世代の女性たちと比べて特に厳しいものだといえる。にもかかわらず、エヴリンがフランクとの結婚もアイルランドからの脱出も選択しなかったのは、エヴリンの中にあるアイルランド性と異国性の両義的なイメージが彼女をジレンマに陥れ、異国性を希求してもアイルランド性へと回帰するというパラドックスを繰り返し経験してしまうからと言える。

フランクの人物像

フランクの人物像は物語の中で明示されてはいない。「エヴリン」では、エヴリンの意識が三人称の地の文

に埋め込まれたいわゆる自由間接話法と呼ばれる形が語りの形式として取られており、奥原宇が述べるように読者は、「フランクの人物に関する情報をすべてエヴリンの視点を共有した三人称の語り手経由で手に入れる」(113) ため、フランクの人物像は確実性を欠いたものになっているからである。本発表では、フランクの人物像について、アイルランド性と異国性の両性質を備えたハイブリッド的な存在であること、それによりエヴリンの心の揺れ動きが助長されることを提起し、フランクの身の上話の中で船乗りにもまつわる話が多く語られている点に注目した。フランクの背景について、エヴリンの意識を反映した語り手による語りの場面では、主にフランクの船乗りとしての身の上話や経験が示されているが、これらは、エヴリンがフランクから聞いた話や彼との思い出の中から船乗りと結びつく内容のものを意識的に思い出しているからではないかといえる。アイルランドを脱出しようとしているエヴリンにとって、フランクが船乗りであると信じるに足る話題こそ重要だと解釈できよう。そもそもフランクが船乗りかどうかですら断定できないのだが、われわれ読者は、フランクの素性が明らかにされていないにも関わらず、エヴリンの意識を反映した語り手によるフランクの話によって、フランクが船乗りだと思い込んでしまっている。つまり、エヴリンがフランクと船乗りとを結びつける話を中心に思い出し、それを語り手が語ることにより、フランクの船乗りとしての人物像は作られている。そしてそこには、アイルランドから脱出したいと願うエヴリンにとって船乗りの話題が重要であるのが示唆されている。なぜならば、船乗りは異国性を思い起こさせるからである。

一方で、フランクの人物像には、アイルランド性も示されている。“He had fallen on his feet in Buenos Ayres, he said, and had come over to the old country just for a holiday”にあるように、「休暇でアイルランドに帰郷している」、つまりフランクはアイルランド出身であるというのが、異国からやってきたということと同程度に重要な彼のバックグラウンドとして、エヴリンの意識を伝える語り手によって伝えられている。客観的な情報が欠如している「エヴリン」では、語りの技法がフランクを「世界中の海を旅して帰郷した船乗り」、つまり、アイルランド性と異国性の両方を兼ね備えたハイブリットな存在として造形している。

このことから、エヴリンはフランクの船乗りにもまつわる要素に異国性を求めたとしても、それは同時にアイルランド出身であることによる彼のアイルランド性にも直面せざるを得なくなる。祖国からの分離を考えても祖国に帰属してしまうという前節でみたアイルランド性への回帰の構図がフランクの人物像を通してアイロニカルに造られているのが分かる。このフランクの人物造形に見られる祖国性と異国性および祖国性への回帰というテーマは、「船乗りの帰還」のモチーフが使われる小説に見出せる基本的なテーマと重なっている。ただ、「休暇でアイルランドに帰郷している」という状況設定がなされている「エヴリン」の場合、「船乗りの帰還」のモチーフには、帰郷の反復が示唆される。だが、おそらくエヴリンにとって、アイルランド脱出後の帰郷は望むものではない。したがって、フランクの人物像が示唆する帰郷の反復は、エヴリンにとって恐怖の反復に他ならないのである。エヴリンは、アイルランド性からの分離を望み異世界を伝えるフランクにその望みをかけるが、彼のハイブリッド性はエヴリンにアイルランド性への回帰を連想させる。

結論

物語最後の場面では、エヴリンの心の中に映し出される荒れ狂う海の風景が描かれている (EV: 156-68)。世界中の海の荒波は、アイルランド性と異国性との間での揺れ動きの具現化されたイメージとなって、エヴリンの精神および身体に苦痛をもたらす。注意すべきは、“No! No! No! It was impossible.” (EV:162) 以降の記述である。エヴリンの手、顔、そして目など彼女の身体の細やかな描写は、なすすべもない彼女の消極的な姿を際立たせているとはいえ、これら客観的な視点に基づく身体的描写からは、これまでのエヴリンの意識を反映した語り手の語りとは異なり、エヴリンの意識や考えを判断することはできない。であるならば、“the iron railing” (EV:160) をしっかりと握るエヴリンの姿に行くことも戻ることもしないで立ち止るという決断を読み取ることはできないだろうか。エヴリンが国外脱出を断念するのは、アイルランド性と異国性のはざままでエヴリンの意識が常にアイルランド性へ引き戻されてしまうからだった。しかし、行くことも戻ることもせず、そのはざままで立ち止る彼女の最後の姿に、異国への旅立ちを前にアイルランドへと回帰しつつも元の生き方に戻るのではなく、別の道を歩む可能性を見ても良いのかもしれない。

引用文献

Joyce, James. *Dubliners: Authoritative Text, Contexts, Criticism*. Edited by Margot Norris, W. W. Norton, 2006.

Kenner, Hugh. “Molly’s Masterstroke.” *James Joyce Quarterly*, vol.10, no.1, fall 1972, pp. 19-28.

Walzl, Florence. “Dubliners: Women in Irish Society” *Women in Joyce*. Edited by Suzette Henke and Elaine Unkeless. U of Illinois P. 1982, p. 31-56.

奥原宇「難を逃れたエヴリン——フランク女術説再考」『ジョイスの畏「ダブリンナーズ」に嵌る方法』 金井嘉彦・吉川信編、言叢社、2016年、97-118頁。